

災害ミュージアムにおける展示方法に関する研究

The study on exhibition method in the Natural disaster museum

梶谷 沙祐理

Sayuri KAJIYA

SUMMARY

The purpose of this study is to reveal that the exhibition method of Natural disaster museum. We classified the display plan of Natural disaster museum existing to pass the teaching and damage of disaster down the generations. It was found that there is common purpose in the exhibition in Natural disaster museum. In these facilities to be researched, I knew that there was the common role that I made use of important and enlightenment the disaster prevention awareness of local inhabitants through disaster display.

KEYWORDS

Natural disaster museum, disaster exhibition, Disaster awareness

1. 研究の背景と目的

日本はこれまで地理・気候的な条件下から自然災害によって多くの被害を受け続けている国である。このような自然災害によって引き起こされた災害被害を遺構として保存し、非日常から日常へと移行していく災害後の社会に教訓や啓発を与えるために、災害ミュージアムや博物館を記憶のミュージアムとして残していく働きがある。本研究では、災害の被害や教訓を後世に残していく、災害ミュージアムに焦点を当て、展示の近年の傾向を把握し今後、来館者に対して有効な展示を行うことに資することが出来ればと考える。

2. 調査の内容

今回は東北（宮城県）の2つの災害ミュージアム（以下ミュージアムとする）と関西圏（大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、和歌山の2府4県）の5つのミュージアムに対し現地でのヒアリング調査を行った。関西圏のミュージアムで調査した項目は全13項目。ミュージアム内を実際に見学する際には常勤の方に展示内容及び災害の説明を受けながらの調査を行った。その他運営状況など不明な場合は別途電話でのヒアリングを行った。

3. 調査結果

調査を行った関西圏の5つのミュージアムでの調査結果は表3にまとめている。

（1）関西圏のミュージアムの調査

関西圏のミュージアムでは表1であるように東日本大

震災、南海トラフ地震についての展示があるところが5施設中3施設。災害以外の設置地域の歴史文化に関する催し及び、イベント、展示を行っている施設が5施設中5施設。災害が発生した際の避難シミュレーションや、施設近くの避難場所を示している展示が5施設中3施設存在した。東日本大震災を受けて展示を大きく変えている施設は5施設中4施設見られた。東日本大震災発生後、来館者数の大きな変化はみられなかったが、一般客の来館頻度が増加傾向であった。また常勤者も施設案内に伴い、自主的な勉強会などを行い震災以前より、災害知識や防災知識の向上を行っている。また展示の方法では表3にあるジオラマ展示や映像展示を用いることで視覚から印象を与えることが災害展示において有効であることが分かる。東日本大震災後、表2で示すように、展示内容が災害の恐ろしさの展示から、災害から身を守る「自助」の重要性について示す展示へリニューアルしている。

（2）東北地方のミュージアムの調査

東北調査でのヒアリングで明らかになったことは、実際に災害ミュージアムを作り上げている人々が被災者として今後どのように生きていくのか、どのように震災を伝えていくのかという想い、施設のあり方についての展望を明確に持っているということである。被災地に暮らす人々や、施設の職員は、生まれ育った地域に愛着を持っており震災の被害だけでなく、その地域の本来の文化や歴史を、訪れた県外の人々に知って欲しいという思いがあり、その思い

が災害ミュージアムの展示のコンセプトにも含まれていることを感じた。

(3) 共通点

今回調査した東北と関西圏のミュージアムで共通して見られた点は、本来ミュージアムには地域住民の災害への関心や防災意識の向上に役立てたいという展望があるということ。また、それが達成されていない現状があるために、表3で明示している地域の人々の関心を得るような地域の年間行事や、歴史の紹介、民具の展示などを行う施設が存在する点である。

表1 展示内容の調査

ミュージアム名称	津波・高潮ステーション	仁川百合野地滑り資料館	北淡震災記念公園 野島断層記念館	福知山治水記念館	津波防災教育センター (福むらの火の館内)
東日本大震災を受けた後 展示内容の変更	○	×	○	○	○
東日本・南海トラフに関する 展示	○	×	○	×	○
防災・減災知識に関する展示	○	○	○	○	○
地域の歴史文化に関する 展示	○	○	△	○	△
地域の遊程の方法や シミュレーションの展示	○	×	△	×	○

表2 東日本大震災後の変化

来館者層	小・中学生の防災教育のための来館や防災研究者の来館頻度は変化が見られなかったが、震災後は一般客の来館頻度の増加が見られた。
関心	来館者(一般客)の災害に関する関心が高まり、災害に関する興味関心の向上が見られる。展示を見学するだけでなく、災害の概要や、防災に対する質問なども多く寄せられるようになった。
常勤者の現状	来館者の知識向上のために、常勤する職員も知識の向上が必要となった。そのため、定期的に勉強会を行ったり、災害関係の学会に参加したり講演を行う頻度も増えた。
展示	震災前: 災害の恐ろしさ・被害の甚大さ 震災後: 災害から自分自身の身を守るためには「自助」

表3 災害ミュージアム調査結果概要

ミュージアム名称	津波・高潮ステーション	仁川百合野地滑り 資料館	北淡震災記念公園 野島断層記念館	福知山治水記念館	津波防災教育センター (福むらの火の館内)	
ハザードの種類	津波・高潮・地震	地滑り	地震	水害	津波	
災害名	三大台風	阪神淡路大震災	阪神淡路大震災	昭和28年西日本水害	安政地震津波	
災害発生日	—	1995年1月17日	1995年1月17日	1953年6月25日・29日	1855年11月11日	
博物館概要	博物館設置機関	大阪府	兵庫県	株式会社 ほくだん	国土交通省	
	博物館運営機関	大阪府	兵庫県	株式会社 ほくだん	福知山市	
	訪問者数(H25)	40,294	7,710	163,994	3,413	41,406
	建物面積	724㎡	621.80㎡	2,985㎡	177.83㎡	591.41㎡
主たる訪問者	学生・一般市民	一般市民・JICA・NGOなどの国際防災関係者	学校団体(小・中学生防災教育)・JICA・NGOなどの国際防災関係者	一般市民・学生団体(小・中学生防災教育)	一般市民・学生団体(小・中学生防災教育)・防災関係研究者	
入館料	無料	無料	有料	無料	有料	
常勤者	有	有	有	有	有	
主な展示概要	・海より低いまち大阪の再現(3大台風と潮位、海抜地域)・大阪の高潮対策(歴史の資料、防潮水門ジオラマ再現、防潮扉、水防団の活動)・ダイナキュブ(津波災害体験シアター)・津波の恐ろしさやメカニズム東南海・南海地震に夜津波への対策と予想・南海トラフ巨大地震津波による浸水想定区域(地図)・津波避難シミュレーション・学びのサロン(東日本大震災の被害(映像)・文庫、非常持ち出し袋)	・砂防事業、土砂災害、土石流対策についての展示・地すべりの原因、メカニズム、かけ崩れ対策と地滑り対策の対比が可能な模型展示・土石流対策模型・地滑り対策事業のジオラマ展示、仁川百合野地地すべり対工事の航空写真(経過確認可能)・日本の地すべり被害の紹介・兵庫県での地すべり被害の紹介・自動観測システム監視室・六甲山系周辺の土砂災害危険場所シミュレーション	・断層保存ゾーン(断層の説明、断層ライフカメラ)・ジオラマ展示(生け埋のずれ)・地層をトレンチ発掘調査した結果・神戸の断層・メソソールハウス(地震の揺れと建物被害の関係を示明するもの、淡路地区の地震被害と復興の様子を紹介)・地震のメカニズムの説明(液状化の実験など)・震災体験館	・由良川と地域の暮らしの関わりを物語る民具資料・由良川の概要及び既往水害についてのパネル展示・水害時に使用していたカカの展示及び体験・町屋浸水模型演出(映像と模型演出の連動)・シアター展示・水位モニュメント・防災減災イラスト	・3D津波映像シアター・防災体験室(ゲーム形式、非常持ち出し袋、体験映像)・津波シミュレーション・津波ラプソディー(書籍、津波避難シミュレーション、年表)・企画展示室(国土交通省の情報提示、東日本大震災の被害状況、和歌山県の防災対策)ガイダンスルーム(災害時の一時避難場所、備蓄場所としての役割を果たす)	
	展示の目的・視点	・以前大阪を襲った高潮や近い将来必ず大阪を襲うと言われている東南海・南海地震の知識を学び、地震、津波発生時の対応などを学ぶため ・災害への備えの大切さを学ぶため	・自然の恐ろしさや土砂災害の仕組みを学ぶため ・地すべり対策工事の仕組みを説明するため	・国指定天然記念物、野島断層を保存、展示し解説を行い「防災」について学ぶため ・本物の野島断層を展示し被害の大きさを見て被害の軽減にむけて考えるため	・水害と水防の歴史を語り継ぎ、今後の治水、防災の在り方について考えるため	・濱口梧蔭の防災精神や、「福むらの火」の人命尊重の精神を踏まえ来たるべき津波災害に備えるため
展示の特徴	・小中学生にも分かりやすい原寸大のものや写真、石碑のレプリカなどの展示 ・大阪府の取り組み防災についての展示	・兵庫県の土木局によって行われた砂防事業の説明展示	・本物の断層を保存、展示・トレンチ展示(地下2.5mまで掘り下げ断層を露出させ地層の変化を明示)・地震断層が横切る民家を買い取り、震災当時同様に再現	・明治13年に建築された市内でも最も古い町家のひとつである呉服屋を利用・昭和28年水害の際の水害の水跡の有る展示物・ボランティアによる運営参加(語り部兼任)・水害に備えて設けられた「カカ」の展示・民具資料	・和歌山県の取り組み防災の取り組みや独特の防災対策についての情報更新・海外に対して「福むらの火」の教訓に付いての説明を行った書籍の配布・広川町の地元住民の津波体験館を作成	
展示パターン	パネル展示	有	有	有	有	
	映像展示	有	希望する場合有	有	有	
	ジオラマ展示	有	有	有	無	
	体験型展示	有	有	有	有	

4. 今後の考察と課題

これらの現状を踏まえ災害ミュージアムにおける有効な展示・運営方法について述べる。調査で、災害は地域における1つのイベントとして位置付けられていることが分かった。そのため災害後、ミュージアムは地域のメモリアルな空間あるいは吊いの場となることが望まれる。また継続的な集客と、地域と結びつきを強め地域住民の集客を望むため、定期的な災害・防災に関するイベントや地域での年間行事を開催するなどの提案をミュージアムにおいて行っていくことが必要ではないかと考える。展示の分野では、ヒアリング調査を踏まえて、東日本大震災の発生を期に、私たちが避けることが出来ない災害に対して、自分自身の身を最優先に守ることの「自助」重要性を示すものが今後の災害ミュージアムで最も有効となっていくのではないかと考える。

引用

1) 阪本真由美, 矢守克也, 災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察 -地震災害のミュージアムを中心に- 自然災害科学, J. JSNDS 29-2, PP. 179-188 (2010)

参考文献

- 1) 災害語り継ぎ研究塾, <https://sites.google.com/site/saigaikk2013/saigaikiokukiraku> (アクセス日: 2015/01/25)
- 2) 公立歴史博物館における通史展示の展示シナリオと展示設計 日本建築学会計画系論文集, 第77巻, 第671号, PP. 235-242 (2012)
- 3) 杉本めぐみ, 記憶と解放, 記憶と伝承-インドネシア・アチエの津波経験を踏まえて-情報知識学会誌 Vol. 22, No. 4
- 4) 富所弘充, 岸功規, 国営海の中道海浜公園における福岡県西方沖地震による震災地の保存・展示, 土木学会地震工学論文集 (2007)